



### 三十八度線

川田 篤  
弁護士・弁理士



戦争中、母の家族は、満州に住んでいました。わが国の敗色も濃厚な戦争末期、突如、ソ連軍が満州に侵攻してきました。母が小学校高学年のことです。満州国の地方法官（裁判官に相当）を務めていた祖父は満州に残りました。祖母は、祖父から渡された預金などを持って、長女の母ら五姉妹を連れて、朝鮮へ向かいました。

満州と朝鮮との境に鴨緑江という川が流れています。母らは、そ

の鴨緑江を渡河してすべの義州という朝鮮の町で、わが国の無条件降伏を知りました。玉音放送を聞いたというような話を母が話していた記憶がありません。恐らく、ソ連軍が迫り、一刻を争う避難の中、ラジオを聞くどころではなかったでしょう。

間もなく、ソ連軍が三十八度線以北の朝鮮北部に侵入し、占領しました。他方、朝鮮南部は、米軍が占領しました。北部にいた日本人は、満州からの避難民も含めて、移動が禁止されたようです。祖母、母、妹たちは、ほかの避難民とともに、義州から少し山に入った亀城という町の近郊にある朝鮮人の農家に間借りすることになりました。そこで、翌年の春のころまで一冬を過ごしました。

このようにして食料を得ていたのは分かりません。しかし、祖母は要領のよい方でしたので、何とかしていたようです。洗濯は近所の川でした。母らが川で洗濯していると、朝鮮人の子供から、いろいろ嫌がらせを受けたそうです。これは子供の話ですが、朝鮮人の大人がどのように日本人の避難民に接していたのかは、母も子供であったせいか、話を聞いていません。それから、ソ連兵による荷物検査もされたそうです。祖母は、避難に際し、箸の代わりに金属製のスプーン、フォークを持参していましたが、没収されたと聞きました。

子供に嫌がらせをされても、食器を没収されても、それまでのことですが、越冬中に病気も流行し、

### ふるさと伝言

多くの幼児が命を落としたと聞いています。長女の母ら五姉妹のうち四女のみ智子叔母は、師走に入り、四つで亡くなりました。母ら家族の部屋にはオンドル（朝鮮式の床暖房）もなく、ジフテリアになり、呼吸困難になったとのことです。

春になり、朝鮮北部の日本人は、許可が下りたのか、三十八度線を目指して移動し始めました。ただし、歩いてです。何日かかったのかは分かりませんが、三十八度線を越えたところで、米軍から殺虫剤のDDTの白い粉を頭も服も真っ白になるまでかけられたそうです。米軍は、避難民に食料を与え、朝鮮南部の港まで汽車に乗せてくれたとも聞きました。日本人がソ連よりも米国びいきなのは、この辺り

にも原因があるかもしれません。祖母、母、その妹たちが帰る所は、もちろん、ふるさと郡中しかありません。海を渡り、夏ごろ、郡中にたどり着いたところ、祖父は既に郡中に引き揚げていました。満州の赤峰にいた日本の憲兵や検察官は連行され、裁判長は理由は分かりませんが銃殺されたそうです。しかし、祖父は、満州人の刑罰を軽くしていた功德か、おとがめも受けず、無事、帰国して来ました。

四女の叔母は、戦争さえなければ、今ごろは古希を少し過ぎた老婦人だったでしょう。四女の妹こそ失いましたが、母たち家族の郡中での戦後の生活が始まりました。（かわだ・あつし、本籍伊予市）